

オルガヌムの歌い手たち

平 井 真希子

1 はじめに

いわゆる「ノートルダム楽派のオルガヌム」の作曲者としてレオニヌスとペロティヌスという名前が知られており、12世紀後半から13世紀にかけて活躍したと考えられている。しかし、最近の研究によれば、現在残っている楽譜史料の多くは、何十年も口頭伝承で伝えられたものが後になって何かのきっかけで記譜されたものだったと思われる。すなわち、レオニヌスやペロティヌスが作曲したままではなく、多くの歌い手によって伝えられる間にさまざまな変化を受けているだろうと想像されるのである¹。

近年、このような観点に立って、オルガヌムが演奏された場や、演奏にたずさわった人々の立場などに焦点をあてた研究が少しずつ出てきている。本論文では、そういった最近の研究を参考にしつつ、セクシュアリティとの関わり、典礼でのポリフォニーの位置づけ、経済状況の変化といった面からオルガヌムを見てみたい。それによって、12世紀から13世紀にかけて最盛期を迎えその後衰退していったオルガヌムの歴史に、歌い手たちを取り巻く社会状況の変化がどのように関わっているかを検討したい。

2 オルガヌムとセクシュアリティ

レオニヌスやペロティヌスの登場以前から、教会の場でオルガヌムあるいは類似のポリフォニーが歌われていたことは間違いない。しかし、その歌い手について描写したと思われる文章はわずかしか残っておらず、それらはとうてい好意的とは言えないものばかりである。例えば、イングランドのシトー会の司教、リヴォールのアエルレド（1109?～1167年）は次のように述べている。

何のためにそのように音を短くしたり分割したりするのか？ [テノルと] 唱和したり、分かれて歌ったり、また高い音で歌ったりする者がいる。またある者は中間の音を分割したり、さらに細かく分けたりする。（中略）

口にするのも恥ずべきことだが、時には馬のいななきのような声になったり、時には

男らしい活力を失って女のような細く高い声になったり、またある時にはわざとらしく声を回転させてこちらへあちらへところがしたりしている。また時には、歌い手たちがのどを詰まらせたように息を吐いて、歌を止め、ばかばかしい声の中断によって沈黙しそうになったりするのを、あるいは今にも死にそんな人の苦痛や苦難に耐える人の恐怖を真似したりするのを見るだろう。そうかと思うと、役者のような身振りで体全体を震わせ、唇をゆがめたり、眼をぐるりと回したり、腕をさし上げたり、1つ1つの音符に対して指を曲げて見せたりする。こんな笑止千万の放埒が礼拝の名で呼ばれている²。

「女のような」という言葉を使っているが、当時男性が優位な性であるというのが常識的な考え方であり、男性の持つ何らかの欠点を「女っぽい」という言い方でけなすのは常套句のようになっていた。しかしそれだけでなく、ポリフォニーを歌う際には相当に芝居がかった身振りを伴うこともあったらしいことがうかがえる。

12世紀においては、ポリフォニーは典礼を華やかにする要素ではあったものの、まだ典礼の本来の構成要素としては認められていなかった可能性が高い。12世紀の写本でまとまった数の単旋聖歌とポリフォニーを筆写したまれな例である『カリクストゥス写本』でも、単旋聖歌が写本冒頭の主要部分を占めているのに対し、ポリフォニーは巻末に補遺としておさまられているのも、そういった見方を反映しているのかもしれない³。台頭しつつあった典礼でのポリフォニーが感覚に訴える要素を持ちすぎるとはならないかと懸念する声はけっして小さいものではなかった。そして、当時の一部の聖職者にとって、その感覚に訴える要素とは、性的な刺激と境界を接するもののように感じられていた形跡がある。代表的な例として、イギリス人だが12世紀前半にパリで長期間勉強に励み、アベラールの弟子でもあったソールズベリーのヨハネスの著作を引用しよう。

神の御まなざしの前で、まさに聖殿の内奥において、全くの虚栄から、気ままでみだらな声で音符やフレーズの終わりを女っぽいやり方で歌うことにより、若い魂をとりこにし骨抜きにしようとする [歌い手たちがいる]。彼らが前で歌ったり後ろで歌ったり、一緒に歌ったり別に歌ったり、合間に歌ったり不吉な歌い方をする柔弱なやり方を聞けば、人間ではなくセイレーンたちの合唱だと信じてしまうだろう。このように高音や最高音が低音や最低音と混ぜ合わされているので、耳からその判断力がほとんど失われてしまうほどである。確かに、このようなやり方が過度にわたれば、精神的な敬虔さよりも、下半身への刺激のほうが先に引き起こされてしまうだろう⁴。

これらのポリフォニーの歌い手を非難した言説に共通しているのは、ある意味での「性的逸脱」に対する嫌悪感であると言えるのではないだろうか。ここでいう性的逸脱とは、主として、華美なポリフォニーが聞き手の女性的な柔弱さを助長すること、男性が女性的な声や

歌い方をすることで男性らしさを失うことを意味していた。

しかし、それだけでなく、当時のポリフォニーが同性愛的感情と結びついていたと主張しているのがBruce Holsingerの研究である。彼は、2001年の著書の中で1章をこの問題にあてており、レオニヌスの書いたとされる手紙の中に同性愛的な要素を読み取っている⁵。最近の研究では、レオニヌスは、パリのノートルダム聖堂で参事会員として活躍した人物ではないかとされている⁶。1179年から1201年にかけて、書類への署名など活動の記録があり、また長編の宗教詩1編、韻文の手紙4通も残している。

手紙のうち1通は匿名の男性の友人にあてたもので、「愚者祭⁷をいっしょに過ごしたいので戻ってきてほしい」と呼びかけている。愚者祭には当時かなり問題視されるほどの無礼講が行われており、性的な放埒を糾弾する文書なども残っているが、その中には当然男性聖職者どうしの関係が問題にされている場合も多かった。しかしそういった状況証拠の他に、手紙自体の中にも肉体的な関係を念頭に置いたと思われる表現が見られる。

祝祭の日、他の人々には杖とともに新しい年がやってくるが、
私にとっては君が来る日こそ祝祭の日になるだろう。
その時、私は愛をこめて君の首に腕を巻きつけ、
愛しい胸を愛しい胸に押しつけるだろう。
甘い戯れと心のおごそかな秘密、
その時こそ二人はお互いに自らのありのままを見せることになるだろう⁸。

これは男性間の愛情表現だといって間違いないと思われるが、それがどのような意味合いを持っていたかを知るためには、中世の同性愛についての考え方を確認しておく必要がある。

中世以降近代に至るまで、ヨーロッパのキリスト教圏では同性愛行為を「ソドミー」と呼び、非常に罪深い行為だとしてきたのは周知の事実だが、実はキリスト教の歴史の中で同性愛に対する扱いが一貫して厳しかったわけではない。ボズウェルによれば、聖書自体や初期キリスト教会の文書は、貪欲や隣人愛の欠如は非難しているものの、同性愛行為に関しては特に明言していない⁹。また、「ソドミー」の語源となった旧約聖書の『創世記』の中のソドムの町の逸話にしても、この挿話それ自体は直接同性愛のことを言っていない。中世前半においては同性愛というのはキリスト教の中心的な問題とはされていなかったと思われる。それだけでなく、11世紀から12世紀にかけては、文学などの中に同性愛を題材にしたものが数多く登場し、「ゲイ・サブカルチャー」とでもいうべき様相を呈していたという。

当時ゲイの男性を表象していたのはガニューメデス、すなわち鷲によって天上界へとさらわれ、ユピテルの酌人にされたという神話中のトロイアの王子であった。この美少年を題材にした文芸や美術が多数登場していることから、同性愛と異性愛の間に本質的な区別をたてず、むしろ同性愛のほうを優れた人物にふさわしいと考えていたと思われる古代ギリシアの思想

の影響もあった可能性がある。

先ほどのレオニヌスの手紙の持つ意味合いをこういった時代背景を念頭において見直してみると、それはレオニヌスが同性愛者であったことを直接意味するわけではないにしても、その可能性は十分考えられるし、それはけっしてまれな現象だったというわけではないことがわかる。それでは、そのこととオルガヌム作曲との間に何らかの関係があるといえるのだろうか。証明することは不可能だといってよいだろうが、当時のオルガヌムとゲイ・サブカルチャーの間に接点あるいは文化的背景の共有があったという可能性は十分考えられる。

Holsingerは、1100年前後の作者不明の理論書『オルガヌム創作法』*Ad organum faciendum*の中の次のような一節を紹介している。

聖歌がすばやく上行すると、D音上にコプラが作られるだろう。

CとEは甘美な笛のようにそれ（コプラ）を準備する。

そして第4の音であるDは音に甘美な友情をもたらす、
くちづけをかわす者たちはお互いに近くに在るべきだから。

（中略）

オルガヌムは上で、あるいは下で、すべてを手に入れる。

最強の兵士のように激しい喜びをもって走り回る。

年長の君主あるいは主人のように音を統括する。

このように（オルガヌムを）付け加えることによりずっと甘美に響くようになる。

聖歌は先行者であるため、従属的なものにとどまる、

先を行く者は、後に続く者よりずっと小規模なものなのだから¹⁰。

ここでは聖歌声部とオルガヌム声部が2人の友人に例えられている¹¹。彼らの関係は単に精神的なものではなく、「くちづけをかわす」ようなものであり、最後の部分での「上で、あるいは下で」といった表現やオルガヌム声部が広い音域を動き回るため支配的、聖歌声部が従属的な役割を果たすといった表現は肉体的な関係を暗示しているとも解釈できる。

さらにもう1つ興味深いのが「コプラ」という言葉である。これはオルガヌム理論書にしばしば登場する言葉で、時代によりその意味は異なっている。この理論書ではオルガヌムのフレーズを3つの部分に分けており、開始部分のinceptioではユニゾン、オクターヴ、5度、4度を、中間のmediumでは5度、4度を用いるとしている。フレーズの終わりはcopulaあるいはcopulatioと呼ばれ、いずれかの協和音程を経てユニゾンあるいはオクターヴに移る動きを意味している¹²。また、フレーズの途中にユニゾンやオクターヴがある場合も、その前の音としては協和音程が使われており、そういった場合もコプラに含めている。要するにここでの「コプラ」は、一種の定型的終止形ないしカデンツとしての役割を果たす音型を意味する専門用語として使われている¹³。なお、『オルガヌム創作法』だけでなく1100年頃から1300年

頃にかけて筆写された複数の理論書に同じようなコプラ概念が見出され、それらは1970年の Eggebrecht、Zaminer共著の校訂版にまとめられている。

なお、copulaという語は、英語の“couple”の語源であることからわかるように一般的に「結合」という意味で使われるが、「性行為」という意味で使われることもあった。この語に直接由来する英語の“copulation”という単語は、人間や動物の「性交」を意味している。さらにcopulaには文法用語の「繫辞」、すなわち英語のbe動詞のように主語を動詞以外の述語と結合させる語という意味もあった。その際ラテン語では主語と述語の性・数を一致させる必要がある。こういった性格から、copulaというのは同性愛的な連想をさそう単語であった可能性がある。

12世紀に流行した作者不明の「ガニューメデスとヘレネ」という詩がある。2人の主人公が神々の前で同性愛と異性愛の優劣について論争するという内容であるが、その中に次のような一節がある。

ガニューメデス「相違は分裂のもと。正しく結合するのは、同じもの同士。
男と男が結ばれるのこそ、優雅な組合せ。
知らぬなら教えよう、文法では、
同じ性のもの同士は結びつけねばならないのだ。」¹⁴

これらの証拠は、あくまで当時のオルガヌムとゲイ・サブカルチャーの間に接点あるいは文化的背景の共有があったという可能性を示すにとどまっている。しかし、男性どうしの声が絡み合い、時には一方が女性的な役割をするポリフォニーという存在が、人によってはホモセクシュアルな連想を誘ったということは十分ありうる話である。

こういったゲイ・サブカルチャーがどういった経緯で登場したのかはまだ研究が進んでいないが、人口増加や都市化の進行、古代ギリシアの文化の再発見、イスラム文化との接触などの要因が関係しているという推測は可能である。しかし、このような同性愛に寛容な時代が長く続くことはなかった。1179年の第3回ラテラノ公会議では、歴史上初めて同性愛行為に関して破門など厳しい制裁を課すことを決定している。この時点ではこの制裁は実行されなかったが、その後長く続くキリスト教会の同性愛否定がはっきりとした形をとったのがこの頃だといえよう。12世紀末にノートルダム聖堂の先唱者をつとめたペトルス・カントル（1197年没）は、ソドミーを殺人にも匹敵する大罪として激しく糾弾する文章を書いている¹⁵。前述のようにレオニヌスの活動記録は1179年から1201年にわたっているので、こういった潮流を身近に感じていたのではないかと思われるが、どのような反応を示したのかはもろんわかっていない。

3 主流化するオルガヌム

前節で述べたように、12世紀の史料にはポリフォニーを非難する言説が目立っていたのに対し、世紀の終わり頃になると教会の典礼でオルガヌムを歌うことを指示する文書が登場するようになる。1198年の降誕祭の時期に、パリのノートルダム聖堂でペロティヌスが作曲した4声オルガヌムが演奏されたという推測の根拠としてしばしば取り上げられるパリ司教ユード・ド・シュリーの1198年の教令を見てみよう。

従って私は、上述のように主の割礼の祝日が規則どおりに祝われていないことが認識されており、教会の不品行がはびこっていることが知られているということを参事会員の地位にある者に思い出させることを望み、先に述べた教皇特使の権威に基づき、さらに熟慮を加え、上述の祝日の次第を次のように定めた。祝日の前夜には、晩課の際、単純な復唱祝日の場合の規則どおりに、鐘が鳴らされる。(中略)それに加えてレスポンソリウムとベネディカムスを3声、4声、あるいは2声で歌うことができる。あるいは絹のカップ(祭服の一種)を着用した4人の副助祭によってレスポンソリウムが歌われる。終課が秩序正しく荘厳に歌われる。それから、朝課の前に最高の祝典にふさわしく等級に応じ1回鐘が鳴らされ、朝課が司教、首席司祭あるいは礼拝堂つき司祭によって始められ、秩序正しく完了されなければならない。この際、第3と第6のレスポンソリウムは2声、3声あるいは4声で歌われる。先唱者は朝課のレスポンソリウム [の歌い手] を指名する。ミサも同様に、他の時課とともに、上述のうちの誰かによって秩序正しく挙行される。それに加えて、挿入文つきの使徒書簡が、絹のカップを着用した2名により読まれ、そしてすぐに引き続いて副助祭自身により読み上げられる。レスポンソリウムとアレルヤは3声、4声、あるいは2声で、絹のカップを身につけた者たちによって歌われ、ミサの中で4人が前に進み出る。(中略) 御言葉の受肉より1198年に施行¹⁶。

典礼のやり方や歌い手の人数は祝日の重要度に応じて変化する。ここでいう「復唱祝日」とは祝日の等級の1つで、主の割礼の祝日(1月1日)はこれに含まれるが、同時に最高の等級「大祝日」である降誕祭(12月25日)から8日めでもある。大祝日はその日からの8日間をoctavaと呼び、その間祝日の意義が続くと考えられたので、この日は延長された降誕祭としての意味も持っていた。したがって、このミサで歌ったレスポンソリウムは‘Viderunt omnes’、アレルヤは‘Dies sanctificatus’であろうと推測されている。なお、復唱祝日の下には「復唱小祝日」という等級もある。現存する楽譜史料から推測すると、オルガヌムの作曲は祝日の等級に応じた選別がなされている。例えばミサ用の2声オルガヌムを見ると、原則として、大祝日の場合は8日めのふんも含みグラドゥアーレとアレルヤの両方、復唱祝日の場合はグラドゥアーレとアレルヤの両方、復唱小祝日の場合はアレルヤのみが作曲されてい

る。ただし3声、4声のオルガヌムの場合それほどはっきりした選別がなされておらず、大祝日である聖霊降臨祭には2声のものしかないが、復唱小祝日でも3声で作曲されているものもある¹⁷。

この教令で典礼のやり方を事細かに列挙しているのは、本来典礼に含まれるべきでないと考えられた要素を排除するためでもある。その要素とは、世俗的な歌、祭服以外の衣装、必要以上のろうそく、晩課の前後の行列などであった。割礼の祝日の前夜に行われる晩課の行列は、本来聖家族のエジプト逃避を記念する意味合いがあったが、そこから連想してロバを教会内に連れ込んだり、ロバの鳴きまねを取り入れた歌を歌ったりする習慣ができてしまい問題視されていたらしい¹⁸。

そういった習慣に比べれば、オルガヌムは本来の聖歌をテノルとして使っているため、典礼の一部として採用するのにそれほど抵抗はなかったであろう。この教令も、本来、愚者祭があまりに下品なものになることを案じ、それにかわる「よりましな娯楽」としてオルガヌムを許可したという性格があったのではないかと思われる。むしろ極端な不品行を禁止した後の不満のはけ口として、多少の「芸人のような、あるいは女っぽい」歌い方は黙認されていたのではないかとも考えられるのである。

オルガヌムはその後、次第に教会の典礼の制度の中に組み込まれていったと思われる。そのことは、オルガヌムが13世紀の多くの楽譜史料で冒頭に華々しく載せられていることからもうかがえる。しかしそれだけでなく、経済面でも変化が起きたと思われるのである。

4 オルガヌムと経済

13世紀初めの教会文書には、聖歌の歌い手に報酬を支払っていたという証拠が残っている。ノートルダム聖堂の古文書を抜粋した*Cartulaire de l'église Notre-Dame de Paris*の中には、次のような記述が見られる。

8月1日の前7日め(=7月26日、1200年?)、(中略)繰り返し予告したとおり、主の御降誕から3日めに祝われる福音史家聖ヨハネの祝日(12月27日)に、朝課に出席した聖歌隊のメンバーは1人あたり3ドニエを与えられるだろう。また、同じ日の主要なミサで、レスポンソリウムあるいはアレルヤを2声、3声あるいは4声で歌った者には1人あたり6ドニエが与えられるだろう¹⁹。

7月15日の前3日め(=7月13日、1208年)、(中略)さらに同司教(=パリ司教ユーロ・ド・シュリー)は、パリ教会で聖ステファヌスの生誕が荘厳にまた規則どおりに祝われるよう、次のように定めた。同日の早朝の典礼に出席した参事会員あるいは他の主要な役職にある者には1人あたり6ドニエ、またそれ以外の聖歌隊のメンバーには1人

あたり4ドニエ、少年聖歌隊員には2ドニエ、ミサでレスポンソリウムあるいはアレルヤを2声あるいは3声あるいは4声で歌った聖職者には1人あたり6ドニエが与えられるよう、毎年パリ首席司祭が取り計らうことを命ずる²⁰。

11世紀後半頃から、高位聖職者が本来の義務であるはずの典礼に出席するたびに報酬を得るという習慣が在俗教会で広まり、改革派の修道会から強い非難を受けていたことが知られているが、オルガヌムの歌い手にも参事会員と同額の6ドニエが支払われている。

キリスト教の典礼は音楽なしにはなりたらず、その音楽を取り仕切る先唱者の地位は非常に重視されていた。しかし、現実にはそのような肩書きをもつ高位の聖職者がすべての義務を果たしていたとはいえなかったようである。Craig Wrightらの研究によれば、当時聖歌演奏の中心となっていたのは“clerici matutinatorum”（朝課の聖職者たち）と呼ばれる16人の若い聖職者たちであった。Matutinumすなわち朝課は深夜におこなわれる聖務日課であり、日中の聖務日課やミサには他の聖職者たちも参加したが、朝課は彼らだけでおこなわれることが多かったためこのように呼ばれていたようである。ノートルダムでは原則として聖歌を暗譜で歌うことが求められていた。これには「心をこめて歌うため」という精神的な理由がなかったわけではないにしても、実際問題として聖堂内が暗く、楽譜を見て歌える程度にまでろうそくをとすのは経済的に問題外だったからだと思われる。

彼らには聖職禄はなく、ミサや聖務日課で歌うことで収入を得ていた。1304年の記録では、1人1回あたり晩課が2ドニエ、朝課が3ドニエ、ミサが3ドニエ、他の小時課が1ドニエであった。勤めごとに鉛のチップのようなものをもらい、月1回まとめて現金に引き換えていたらしい。この金額では生活はかなり苦しかったらしく、彼らをpauperes clerici（貧しい聖職者たち）と呼んだ文書も残っている。彼らの大半はノートルダム聖堂の少年聖歌隊の出身で、声変わりや大学を出て戻ってきたのを機にこの仕事に就く者が多かったという。まだ10代の者も多く、あまり芳しい素行ではなかった形跡がある。彼らの地位は安定したものではなく、任期は洗礼者聖ヨハネの祝日（6月24日）を境にした1年ごとで、必ずしも再任されるとは限らなかった。

この16人の中でリーダー的存在の6人は“machicotus”と呼ばれ、日々の勤めでソロの部分やポリフォニーを担当していた。とくに重要な祝日の場合、ミサなどを盛大にするため出席者に臨時の手当てが支払われ、そこでオルガヌムを歌うこともよい臨時収入になった。先にあげたものと同様の文書は他にも残っており、オルガヌムの歌い手に与えられる金額は常に1人あたり6ドニエである。非常な高額というわけではないが、とくに降誕祭からの1週間にはオルガヌムを歌う機会も多く、そのたびごとに6ドニエずつもらえたとすれば合計ではかなりの臨時収入になったといえよう。こういった報酬の財源は、パリ司教ユード・ド・シュリー自身が寄付したものや、その他に一般の多くの篤志家から「朝課銭」denarii

matutinalesなどいろいろな名目で寄進されたものをあてていた。

それではこの金額でどの程度の生活ができたのであろうか。まず、当時の貨幣単位だが、ドニエにはパリ貨とトゥール貨の2種類があり、おおむねトゥール貨5ドニエがパリ貨4ドニエに相当した。いずれの場合も12ドニエが1スーとなる。トゥール貨20スー、パリ貨16スーが1リーヴルである²¹。Wrightは“clerici matutinorum”の年収を約24ルーヴルと見積もっている²²。1日にミサ、朝課、晩課に1回ずつで8ドニエ、小時課に4回出席すれば12ドニエすなわち1スーになる。賛課、終課については記載がないが、賛課は朝課に、終課は晩課に続けて行われることが多かったので1つのものとして計算しているのかもしれない。小時課は毎日4回おこなうわけではないが、大きい祝日には晩課やミサが複数回ある場合もあるので、1日平均1スーとすれば、パリ貨で考えれば1か月で約2リーヴル、年に24リーヴルという計算になる。

一方当時の物価だが、じつは13世紀の物価を推定するのはかなり困難である。中世フランスの物価を広く調査したD'Avenelの文献では、様々な公文書などに登場する具体的な物の値段を一覧表の形で示している²³。これを見ると、12世紀までは具体的な値段が文書に登場するのはわずかのみで、13世紀からその数は増え始める。しかし13世紀初頭の数字はまだかなり散発的で、全体的な物価がこの位だった、という材料として使うことは難しいのである。また、書類の上ではドニエ銀貨での値段が記されていても、実際の支払いは現物支給であるといった例もまれではなかったようである²⁴。

入手できた資料は断片的ではあるが、その中で生活に密着したものとしては次のようなものがある。ギースらによれば、1250年頃のシャンパーニュ地方の都市トロワでは、去勢鶏1羽が6ドニエ、普通の鶏1羽が4ドニエ、アナウサギが5ドニエ、大きめの野ウサギが12ドニエだったという²⁵。なお、13世紀のパリの職業について記した書にパンの値段が2ドニエ以下とある²⁶。

以上のように大ざっぱな推定しかできないことを前提にあえて推測すれば、「朝課の聖職者たち」が毎回の典礼にこまめに出席して得られる1日の収入約1スーとは、自給自足に近い生活をしてきた一般庶民にとってはともかく、都会でほとんど消費のみの生活をしていれば、食費で消えてしまうような金額である。聖歌の歌い手たちの生活がけっして楽ではなかったことが実感できる。彼らにとって、音楽の才能に恵まれ、経験を積むことによって、典礼でポリフォニーを歌う機会を持つことができるようになることは、収入面においてもけっして小さなことではなかったと思われるのである。11世紀から13世紀にかけての西ヨーロッパは農業生産が増えるなど全体的な豊かさが増した時代であったが、その結果として13世紀初頭頃から少なくとも都市部では貨幣経済が盛んになり、オルガヌムの歌い手たちの生活にも影響を与えていたと言えるのではないだろうか。

Christopher Pageは、写本Cambridge, Gonville and Caius College, Ms. 331/772の中に

含まれているロベール・ド・クールソンの『大全』*Summa*という文章を紹介している。これは1208年から1212/1213年の間に書かれたとされるが、その中に次のような一節がある。

例えば書記などが市場で高利貸しの両替商に自分の仕事や書いたものを代償に金を得る場合のような、ちょっとした仕事について君が尋ねるのなら、私は前と同じようにこう言おう。彼らは高利貸しから受け取ったもののすべてを返さなければならない。

同様に、オルガヌムの先生たちが、若者や無知な者たちの精神を女のように柔弱にするために、彼らの前で芸人のようなあるいは女っぽいやり方をした場合、その行為は不正だと言える。しかし彼らは、教会に奉仕することになるのであれば、正当な歌という仕事によって収入を得ることができる。ただし、節度のない高位聖職者が、彼の教会で芸人のような節度のない歌を聞かせるために、このような節度のない歌い手たちに聖職給を与えた場合、彼は聖職売買の病におちいつていると私は信ずる。しかし、誰かが何らかの典礼で土地の習慣に従ってオルガヌムで歌った場合、芸人のような細かい音符を加えないようにするのであれば、許容される²⁷。

ポリフォニーと女っぽさを結び付けて非難しているという点では先に引用したりヴォールのアエルレドやソールズベリーのヨハネスの文章と似ているが、ここにも金銭による報酬との結びつきという新しい要素が見られるのが興味深い。

Pageはここでいう「オルガヌムの先生たち」*magistri organici*を“*machicoti*”であると解釈し、彼らが不安定な身分と収入をカバーするためにオルガヌムを教えるというアルバイトをしていた可能性もあるのではないかと推測している。*Magister*という言葉は「大学で学位を取得した教師」という意味で使われることが多いが、もっと一般的に「何らかの技能を持ち、それを教えられる人」という意味もある。従来の研究では当時ポリフォニーの講義を大学で行っていたとしているのに対し、もっと私的な形で教えていたと考えたのである。確かに単旋聖歌に関する基礎的知識は大学入学前にすでに身につけているものとされていたし、名目上自由七科の1つであった音楽は、13世紀のはじめにはすでに学問としては重要視されなくなっていた。1230年から1240～1245年の間に作られた写本Ms. Barcelona, Corona de Aragón, Ripoll 109にパリ大学のカリキュラムが載っているが、音楽関連のものはボエティウスの『音楽教程』*De institutione musica*のみであり²⁸、ポリフォニーが大学のいわゆる必修科目であったとは考えられない。しかし、13世紀後半のポリフォニーを扱った理論書に当時の大学で中心的存在であったアリストテレス哲学の影響が見られることは多くの研究者が指摘している。また、1338年のソルボンヌの蔵書カタログにはオルガヌムの楽譜集2冊とともにヒエロニムス・デ・モラヴィアの『音楽論』*Tractatus de musica*の写本が載っており、講義に使われていたらしく、学生が代金を支払って筆写していたと思われる。頻繁に使用されたため、ソルボンヌの図書館では鎖で固定されていたという。なおこの写本はその後フラン

ス革命の時代にパリ国立図書館に移され、現在もそこにある²⁹。

また、この文章を書いたロベール・ド・クールソン自身1200年頃から1212年まで大学で教鞭をとっており、その後枢機卿及び教皇特使に任命されてからは大学の改革と規約の制定をおこなった人物である³⁰。このようにパリ大学と関係の深かった彼が、magisterという言葉で大学とまったく無縁な状況を想定して使った可能性は低いのではないか。ポリフォニーは、大学の正規の科目ではなかったであろうが、大学の課外活動のような形で、大学人によって教えられていたとも考えられる。そうだとすると、オルガヌムの歌い手は“machicoti”に限らず、もう少し高位の聖職者や大学教師も含まれていたのではないだろうか。

いずれにしても、ノートルダム聖堂で彼らの歌に対しおそらく出来高払いで報酬が支払われていたことは、前にあげた史料ですでに示した。しかしここで注意したいのは、ロベールの文章の中の「教会に奉仕することになるのであれば」という時の教会は複数形 (ecclesiaの複数奪格形ecclesiis) であり、また「土地の習慣に従って」というくだりなども考えると、彼らがおそらくノートルダム以外の各地の教会に出張し、オルガヌムを歌って報酬を得ることもあったと思われる点である。Pageはこれらの教会はフランス国外をも含む広い範囲にわたったのではないかと推測している。Craig Wrightは、オルガヌムの諸写本のうち現在フィレンツェにあるFirenze, Biblioteca Medicea Laurenziana, Plut. 29.1.の内容が12世紀のパリの慣習と最も一致しており、他の写本はその中から特定の教会の慣習に合う部分のみを抜粋したのではないかと主張している³¹。Pageはこの説と合わせて考え、ノートルダムで作られたレパートリーが各地の教会の慣習に合わせた形に修正されて広まっていったのには、こういった「オルガヌムの先生たち」が退職後に各地に流れていき、そこでパリ仕込みのオルガヌムを歌って収入を得ていたことも関与していたのではないかと推測している³²。

5 おわりに

13世紀末に活躍したと思われるヨハンネス・デ・グロケイオは次のように述べている。

次にオルガヌムとは、ただ1つの歌詞、すなわち同一の音節をもち、複数の声部が調和するように構成された楽曲(カントゥス)である。「ただ1つの歌詞をもつ」と言ったのは、すべての声部(カントゥス)が同一の音節の上に作られているからである。この楽曲には、2つの異なったタイプがある。そのひとつは、特定の楽曲、つまり教会聖歌に基づくものである。これは教会あるいは[それ以外の]聖なる場所において、神を賛美し、いと高き者をあがめるために歌われる。この種の楽曲こそ、オルガヌムの名で呼ばれるにふさわしい³³。

この頃のオルガヌムはかなり礼儀正しい音楽になっていたようである。世紀の変わり目に

ペロティヌスの作品によって頂点を迎えたオルガヌムは、13世紀後半になって記譜されるようになり、理論書で説明されるようになり、より厳格に管理されるようになっていく。しかし一方では、モテットなど新しい曲種におされて活気を失い、新しい作品は作られなくなる³⁴。その理由の1つとして、同性愛的な声の戯れの喜びや大げさな身振りを伴う演劇的な自由さが失われていったということがあるかもしれない。モテットには一部エロティックな歌詞を持つものもあるが、異性愛的な内容が多いように思われる。13世紀という時代の雰囲気も反映しているのかもしれない。

パリのノートルダム聖堂周辺で、12世紀から13世紀前半にかけていわゆる「ノートルダム楽派」のオルガヌムが盛んになり、その後衰退していった理由は、まだ十分に説明されていない。その歌い手たちの様子を知るための史料は散発的で限られたもののみであるが、それらを組み合わせてみることで、オルガヌムをめぐる状況が社会の変化とどのように関係しているか推測を試みた。12世紀の史料から見るオルガヌムは、「女っばい」と非難される見世物があった音楽だったようである。13世紀になると、俗悪な慣習を抑えるための代替物としての要素を持ちつつも、次第に教会の体制に組み込まれていったように思われる。その過渡期となった13世紀初頭には、それまで寛容だった同性愛に対する教会の態度に変化が見られ、また貨幣経済の発展に伴って、報酬を稼ぐための手段としてオルガヌムを歌っていたという証拠が増えてくる。こういった社会の変化がオルガヌム自体の変質を促し、興隆と衰退の原因の1つになった可能性も考える必要があるであろう。

なお本稿は、平成19年度東京藝術大学博士論文『《オルガヌム大全》の研究』の一部を書き改めたものである。

注

- 1 Roesner, Edward. "Who 'Made' the *Magnus Liber*?" *Early Music History* 20 (2001): 227-266.
- 2 "Ad quid illa uocis contractio et infractio? Hic succinit, ille discinit, alter supercinit, alter medias quasdam notas diuidit et incidit. ... Aliquando, quod pudet dicere, in equinos hinnitus cogitur, aliquando virili vigore deposito in femineae uocis gracilitates acuitur, nonnunquam artificiosa quadam circumuolutione torquetur et retorquetur. Videas aliquando hominem aperto ore quasi intercluso halitu exspirare, non cantare, ac ridiculosa quadam uocis interceptione quasi minitari silentium; nunc agones morientium, vel exstasim patientium imitari. Interim histrionicis quibusdam gestibus totum corpus agitur, torquentur labia, rotant oculi, ludunt humeri, et ad singulas quasque notas digitorum flexus respondet. Et haec ridiculosa dissolutio uocatur religio." リヴォールのアエルレド『慈愛の鑑』*Speculum caritatis*第2巻より。原文はDillon, Emma. "Representing Obscene Sound." In

- Medieval Obscenities*, 78. Ed. by N. McDonald. York: York Medieval Press, 2006. より引用した。なお、明記したものを除きラテン語和訳は筆者による。
- 3 Van der Werf, Hendrik. “The Polyphonic Music.” In *The Codex Calixtinus and the Shrine of St. James*, 127. Ed. by J. Williams and A. Stones. Tübingen: Gunter Narr, 1992.
- 4 “Ante conspectum Domini in ipsis penetralibus sanctuarii lasciuientis uocis luxu, quadam ostentatione sui, muliebribus modis notularum articularumque caesuris, stupentes animulas emollire nituntur. Cum praecinentium et succinentium, concinentium et decinentium, intercinentium et occinentium praemolles modulationes audieris, Sirenarum concentus credas esse non hominum... sic acuta uel acutissima grauibus et subgrauibus temperantur ut auribus sui iudicii fere subtrahatur auctoritas... Cum haec quidem modum excesserint, lumborum pruriginem quam deuotionem mentis citius excitare.” ソールズベリーのヨハネス『ポリクラティクス』*Policraticus*第1巻より。原文はHolsinger, Bruce W. “Polyphones and Sodomites: Music and Sexual Dissidence from Leoninus to Chaucer’s Pardoner.” In *Music, Body and Desire in Medieval Culture: Hildegard of Bingen to Chaucer*, 158. Stanford, California: Stanford University Press, 2001.より引用した。
- 5 Holsinger, *op. cit.*, 137-187.
- 6 Wright, Craig. “Leoninus, Poet and Musician,” *Journal of the American Musicological Society* 39/1 (1986): 1-35; Idem. *Music and Ceremony at Notre Dame of Paris 500-1550*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.
- 7 「愚者祭」とは、「[仏] fête des fous 特にフランスで中世、降誕祭の頃に行われた擬似宗教的色彩をもった行事。古代の農耕神サトゥルヌスの祭りに由来すると思われる。副助祭が祭りの「司教」役で説教のパロディーを演じたところから後に「副助祭の祭り」に発展したと考えられる。道化や無節制、冒瀆に近い行為のゆえに1435年バーゼル公会議で禁止、16世紀末には消滅した。降誕節には他に多くの世俗的な祭りがあったが、いずれも禁止された。」(「愚者の祭り」『岩波キリスト教辞典』東京：岩波書店、2002年、330頁。)
- 8 “Festa dies aliis baculus uenit et nous annus. / Qua uenies ueniet hec michi festa dies. / Tunc ego dilecte ceruici brachia nectam, / pectore tunc caro pectora cara premam. / Seria tunc dulcesque iocos archanaque mentis / fas erit atque statum promere cuique suum.” Holsinger, *op. cit.*, 150.
- 9 ボズウェル、ジョン『キリスト教と同性愛——1～14世紀西欧のゲイ・ピープル』大越愛子・下田立行訳、東京：国文社、1990年、108-133頁。なおこの問題に関しては異なる解釈もあると思われるが、ここでは詳細な検討は省略する。
- 10 “Cantus confestim ascendens in .D. fiat copula. / C. et .E. erunt spectantes quasi dulcis fistula. / Et .D. quarta reddat sonum dulci amicitia. / Quia prope debent esse illa que dant

oscula. / ... / Organum acquirit totum sursum et inferius. / Currit ualde delectando ut miles fortissimus. / Frangit uoces uelut princeps senior et dominus. / Qua de causa applicando sonat multum dulcius. / Cantus manet ut subiectus precedenti gratia. / Quia quod precedit tantum minus quam sequentia.” Eggebrecht, Hans Heinrich and Frieder Zamminer eds., *Ad Organum Faciendum: Lehrschriften der Mehrstimmigkeit in nachguidonischer Zeit*. Mainz: B. Schott's Söhne, 1970, 113-115.

- 11 Holsingerは男性どうしの友人だと断定しているが、ラテン語のcantusは男性名詞、organumは中性名詞であるため、それほどはっきり言えるとは思えない。しかし異性の恋人たちよりは同性の友人たち、あるいは同性の恋人たちというニュアンスが感じられることは確かである。Holsinger, *op. cit.*, 161-162.
- 12 なお、ここでの協和音程はとくに定義されていないが、いくつか短い譜例が添えられており、ここで実際に使われているのは5度、4度、そして少数例だが長短3度及び短6度である。
- 13 Eggebrecht and Zamminer eds., *op. cit.*, 21-22.
- 14 下田立行訳。ボズウェル 前掲書397-398頁。なお、ラテン語原文は入手できなかった。
- 15 ボズウェル 前掲書278-283、381-383頁。
- 16 “Nos igitur, intellecto et cognito quod prescripta sollempnitas Dominice circuncisionis minus regulariter ageretur, volentes in statum canonicum revocare quod in scandalum ecclesie temere noscitur pullulasse, auctoritate prefati legati, adhibita maturitate consilii, supradictam sollempnitatem ordinavimus in hunc modum: In vigilia festivitatis, ad vespervas, campane ordinate, sicut in dupplo simplici, pulsabuntur. ... hoc addito quod responsorium et *Benedicamus* in triplo, vel quadruplo, vel organo poterunt decantari; alioquin a quatuor subdiaconis indutis capis sericis responsorium cantabitur. Complectorium ordinate et sollempniter cantabitur. Pulsato autem unico classico ante matutinos, sicut in summis sollempnitatibus, matutini ab episcopo, vel decano, vel capellano incipientur ordine debito consummandi; hoc adjecto, quod tercium et VI responsorium in organo, vel triplo, vel quadruplo cantabuntur. Cantor matutinorum responsoria ordinabit. Missa similiter cum ceteris horis ordinate celebrabitur ab aliquo predictorum; hoc addito quod epistola cum farsia dicetur a duobus in capis sericis, et postmodum a subdiacono nichilominus perlegetur. Responsorium et *Alleluia* in triplo, vel quadruplo, vel organo, in capis sericis, cantabuntur, et erunt in missa IIIor procedentes. ... Actum anno incarnati Verbi Mo Co XCo VIIIo.” Guérard, Benjamin Edme Charles, et al. eds., *Cartulaire de l'église Notre-Dame de Paris*. (Vols. IV-VII of Collection des cartulaire de France) Paris: Crapelet, 1850, 1, 74-75. なお、“in organo, vel triplo, vel quadruplo”は「3声あるいは4声のオルガナムで」という解釈も可能だが、他にも同様の表現をしている文書で“in organo”を「2声のオルガナム」と解釈したほうが

よい例もあるので、このように訳した。

- 17 ハーパー、ジョン『中世キリスト教の典礼と音楽』佐々木勉、那須輝彦訳、東京：教文館、2000年、80-81頁。*Le magnus liber organi de Notre-Dame de Paris*. Monaco: Éditions de l'Oiseau-Lyre, 1993-. Vol. 2, ed. by M. Everist, p. lix; *Ibid.* Vol. 1, ed. by E. Roesner, pp. lxxiii-lxxix. なお、大祝日にはふつう降誕祭と聖霊降臨祭のほかに復活祭と聖母被昇天(8月15日)が含まれる。
- 18 Wright, *op. cit.*, 240.
- 19 “VII KAL. AUGUSTI. ... Voluit etiam ut de predictis redditibus singuli clerici de choro qui in die festivitatis beati Johannis Evangeliste, que tercia die a nativitate Domini celebratur, matutinis intererunt, tres denarios habeant. Qui vero in majori missa, eodem die, responsum vel alleluia in organo, vel triplo sive quadruplo, cantabunt, singuli sex denarios habeant.” 原文はGuérard, et al. eds., *op. cit.*, 4, 121. による。
- 20 “III ID. JULII. ... Preterea instituit idem episcopus, ut natale beati Stephani sollempniter et regulariter celebretur in ecclesia Prisiensi; et dedit singulis canonicis et personis majori altari servientibus, qui matutinis festivitatis ejusdem intererunt, sex denarios, et singulis aliis clericis chori quatuor denarios, pueris autem duos denarios, singulis vero clericis qui in missa responsum vel alleluia in organo triplo vel quadruplo decantabunt, singulis sex denarios, annuatim percipiendos in prepositura Parisiensi.” *Ibid.*, 4, 107-108.
- 21 堀越孝一『パンとぶどう酒の中世——十五世紀パリの生活』東京：筑摩書房、2007年。
- 22 Wright, *op. cit.*, 24.
- 23 D'Avenel, Vicomte G. *Histoire économique de la propriété, des salaires, des denrées et de tous les prix en general depuis l'an 1200 jusqu'en 1800*. Paris: E. Leroux, 1894-1926.
- 24 ブロック、マルク『西欧中世の自然経済と貨幣経済』森本芳樹訳、東京：創文社、1982年。
- 25 ギース、ジョゼフ、フランシス・ギース『中世ヨーロッパの都市の生活』青島淑子訳、東京：講談社、2006年。
- 26 堀越孝一 前掲書。
- 27 “Si queras de operis minorum puta de scriptoribus in nundinis qui locant operas suas et scripturas feneratoribus cambiatoribus, dico ut supra quod tenentur ad restitutionem omnium eorum que a feneratoribus receperunt. Similiter dicimus quod illicite sunt opere magistrorum organicozum qui scurrilia et effeminata proponunt iuvenibus et rudibus ad effeminandos animos ipsorum, tamen locare possent operas suas in licitis cantibus in quibus servitur ecclesiis. Si autem prelatus lascivus lasciviis talibus cantatoribus det beneficia ut huiusmodi scurrilia sua, credo quod lepram symonie incurrit. Si tamen in aliqua sollempnitate pro consuetudine terre decantent aliqui in organis, dummodo scurriles notule non

- admisceantur, tolerari possunt.” 原文はPage, Christopher. *The Owl and the Nightingale: Musical Life and Ideas in France 1100-1300*, London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1989, 145. より引用した。
- 28 Page, *op. cit.*, 139.
- 29 Baltzer, Rebecca A. “Notre Dame Manuscripts and Their Owners: Lost and Found.” *The Journal of Musicology* 5 (1987): 392-394; Cserba, Simon M. ed. *Hieronymus de Moravia O. P. Tractatus de Musica*. Regensburg: Friedrich Pustet, 1935. なお、この『音楽論』の中には、作者不明の*Discantus positio vulgaris*、ヨハネス・デ・ガルランディアの『計量音楽論』、ケルンのフランコの『計量音楽論』などポリフォニー関連の音楽理論書がともに載せられている。
- 30 Page, *op. cit.*, 145.
- 31 Wright, *op. cit.*, 243-258.
- 32 Page, *op. cit.*, 149-151.
- 33 “Organum vero, prout hic sumitur, est cantus ex pluribus harmonice compositus, unum tantum habens dictamen vel discretionem syllabarum. Dico autem tantum habens unum dictamen, eo quod omnes cantus fundantur super unam discretionem syllabarum. Cantus autem iste dupliciter variatur. Est enim quidam, qui supra cantum determinatum, puta ecclesiasticum, fundatur. Qui in ecclesiis vel locis sanctis decantatur ad dei laudem et reverentiam summitatis. Et cantus iste appropriato nomine organum appellatur.” E. Rohloff, *Der Musiktraktat des Johannes de Grocheo*, Leipzig: Gebrüder Reinecke, 1943, 56. 和訳は、グロケイオ『音楽論——全訳と手引き』中世ルネサンス音楽史研究会訳、東京：春秋社、2001年による。なお、この後に「オルガヌムの第2のタイプ」としてあげているのはコンドゥクトゥスである。
- 34 Baltzer, Rebecca A. “How Long Was Notre-Dame Organum Performed?” In *Beyond the Moon: Festschrift Luther Dittmer*, 118-143. Ed. by B. Gillingham and P. Merkley. Ottawa, Canada: The Institute of Mediaeval Music, 1990.

Singers of Organum

HIRAI Makiko

Organum singing flourished at the Cathedral of Notre Dame de Paris from the 12th to the 13th century following which it declined. The reasons for the decline have not been explained thoroughly. This study attempts to elucidate the background of the rise and fall of organum while focusing on its singers.

In the 12th century, polyphony singers were at times the target of fierce criticism, which often disparaged their “effeminate and degrading” style and alluded to the music’s effects inducing “sexual deviation.” Polyphony singing itself might have shared its background with the “gay subculture” prosperous at the time. Leoninus, one of the two renowned organum composers whose name is found in the coeval treatises, left some homoerotic expressions in his letters. If the church was not excessively harsh toward homosexuality in the 12th century, the atmosphere changed in the beginning of the 13th century when the church authorities began to take a tougher stance against it.

Concurrently, organum was incorporated into mainstream church services. While organum was not highly praised, it seemed to be tolerated as an acceptable form of entertainment. Church documents reveal that chant singing was often subcontracted on a fee-for-service basis to young clerics, and that a fixed amount of money was paid for every performance of polyphony. For young clerics without benefice, the skill of organum singing was an important source of income. At the same time, organum began to lose some of its appeal in exchange for decency.